

ヤーコプ・ヴァッカーナーゲル著

『統語論についての講義 I』(翻訳 第九回)

酒見紀成\*

(平成3年9月24日受理)

Jacob Wackernagel : Vorlesungen über Syntax.

Erste Reihe (A Japanese Translation 9)

Kisei SAKEMI

(Received Sept. 24, 1991)

XXV.

特に興味深い用法、受動態の非人称用法についてまだ語らねばならない。143頁で述べた受動態に立ち至る二つの要因のうち、ここでは二番目の要因だけが問題になる。つまり出来事自体について語りたという欲求が動作主を前面に出さないというものである。この表現法は特にラテン語で行われており、ここでもとりわけ紀元前三世紀と二世紀の喜劇に見られる古代ローマの会話の言語がそうで、そこからその用法を確証し、それが完全に生きていたという確信を得ることができる。さっそくプラウトゥスに、一人称か二人称能動態が期待される箇所非常に注目すべき例が沢山見出される。例えば『プセウドールス』273のある詩行に *quid agitur?* [「どうしているね」とあり、返事は *amō atque egeō* [「あの娘にほれてるが、すってんてんの文なした」]<sup>1)</sup>ではなく *amātur atque egetur* である。『トルクレントゥス』369ではプラウトゥスの写本集はアンブrosiアーヌス写本の正当な *benene ambulātumst* [「旅行はよかったの」] に対して解釈の助けとなる異文 *benene ambulāsti* を示す。*ut valetur?* [「調子はどうか」という、我々には全く遂語的に訳すことのできない問いすらあり、*valetur* が *valēs* [「君は健康である」] の代わりに使われている。もっと奇妙なのは *caletur* [「暖かい」] である(これに倣って凝古主義者のアープレイウス<sup>2)</sup> は大げさに *quā pluītur et ningitur* [「雨が降り、雪が降る限り」と書いている)。*calet* はプラウトゥスの作品では「暖かい」を意味し、常に何らかの主語と共に使われる(リンゼイによる『捕

虜』80の注)。ここでも今しがたプラウトゥスの通常受動態の用法において確証した動作主を引っ込めさせる例の傾向がはっきり認められる。——テレンティウスの『アンドロスの女』129では葬式のことが語られているが、*in ignem inpositast* [「彼女が火の中に置かれた」]の後に、無造作に *fletur* [「みんなは泣いた」]が続いている。この箇所には古代のテレンティウスの注釈者ドナートゥスのすばらしい論評があり、「非人称的にすべての人について使われたこの *fletur* は正しい。死人の最後は常にすべての人を涙へとかき立てたからだ」と言う。だから彼に従ってそこではみんなが泣いているイメージが想起されるべきである。その方がその箇所の雰囲気にも最も一致する。テレンティウスの別の箇所では、同じ作品の403行で、ある者が[ある娘の]保護を求められる際に *curābitur* [「そいつは何とかなるでしょう」と言われる。これについてドナートゥスは、何か厄介な事が問題になっており、しかし語り手はすべての負担を引き受けると申し出たくないので、*curābō* ではなく、非人称の表現形式が使われていると述べている。我々はそれを「きっと何らかの配慮がなされるだろう」と訳すことができる。

さらに注目すべきは、アウグストゥス時代の人、特にウェルギリウスがこの表現形式を奇妙に好んでいる事である。それはすでに古代の学者達の注意を惹いており、例えばクィンティリアーヌス I 4, 28 と プリスキアーヌス 17, 68 (『ローマの文法家』III 148, 9 以下) 18, 55 (III 231, 10 以下) を参照されたい。例えば『アエネーイス』の第六巻では先ず177行で (*omnēs*) *festinant, flentēs...certant* [「彼らは涙ながらに

\* 広島工業大学一般教育(英語)

取りいそぐ……競い合う」と言われた後、179行に *itur in antiquam silvam* 「それからみんなで古い森にわけ入る」とある。『アエネーイス』I, 700 (*discumbitur* 「みんな横になる」)。7, 553. 10, 355も同様<sup>3)</sup>、特に『牧歌詩』I, 11 以下の *undique totis usque adeo turbatur agris* 「その土地では至る所で絶えず騒ぎが起きる」が多くの事を教えてくれる。*turbatur* の曖昧さによって、この箇所が与える騒ぎの印象が強められる。騒がすこと (*turbare*) が誰に由来するのか分からず、至る所で騒ぎの出来事しか見えないからである。*turbamur* 「我々は騒がされる」という古い異文は、非人称表現を正しく理解しなかった人々に帰せられる。セルウィウスが見事に書いている。「*turbatur* という読みは正しい。それは広くすべての者に関わるので、非人称と考えられるからである。確かにそれはマントウアの人々の全体的追放であった。もし *turbamur* と書いてあったとしたら、少数の人々を指すと思われるからである」と。(この箇所と同様『アエネーイス』IV 416 *vidēs tōtō properārī litore* [海辺一帯人々がせわしく動いているのが見えるだろう] やリーウィウス II 45, 11 *totīs castrīs undique ad cōsulem curritur*<sup>4)</sup> [陣営の至る所から人々が執政官の所へ駆け寄った] においても、非人称の受動態によって表わされた行為の一般性がはっきり強調されている。ドナートゥスがテレンティウスの *fletur* について述べたことと、次の問題を先取りすることになるが、アリストパネースの『鳥』1160 *ἐφοδεύεται κωδωνοφορεῖται παντοχῆ* [八方で見張りをして廻り、拍子木をたたいて歩いている] を参照せよ。)——非人称の表現は、例えばカエサルの記事や法律用語といった非常に実地的な叙述で好んで用いられているので、何か散文的なものを持っていると思う人があるかも知れない。しかしウェルギリウスではむしろ古風な調子を持っている。ほかならぬ『アエネーイス』VI 179 以下 (*itur*) の箇所全体についてノルデン<sup>5)</sup> はその注釈で擬古調を指摘している。そして我々は古代ラテン語で非人称受動態が特に好まれたことを見た。

ところでとても注目に値するのは、古代語ではその場合行為の目的語が示されるが、それが対格で表わされる事である(エルヌー、『言語学会紀要』XV 290/1頁)。だからそれは我々がふだん出合う[能動態の]裏返しでは決してなく、能動態の構文がしっかり保たれているのであり、主語への言及が押えられたに過ぎない。例えば『ほら吹き兵士』254 *quae mentibitur* 「人がどんなうそをついても」では *quae* は対格しか表わ

し得ず、この箇所を改めるのは正しいとは言えない<sup>6)</sup>。またエンニウスの断片100 *praeter propter vitam vivitur* 「まあどうやら人々は暮らしている」では、写本で確認された対格を *praeter propter* に従属させることはできない。

主にケルト語学者として大きな功績をあげた天才的言語学者ツィンマー<sup>7)</sup> (『クーン雑誌』30, 286注) は、ラテン語で非人称受動態が際立っていて好まれたことを、ラテン語の *r* を持つ形態の固有の性質から解明しようと試み、それは本当は受動態の形態ではなく、能動態三人称複数の古い形態が変形したものだと言っている。しかしこの点に関する判断は、他の言語が如何に使用されるかにも左右される。

ところで有名な文献学者マズヴィー(33頁参照)は、一体にギリシア語は非人称の受動態を嫌っていると言う。彼はそれを(完了の受動態は別として)「言う」を表わす二・三の表現に限っているが、例えば *λέγεται* の場合にも、厳密に言えば確かに非人称の用法はなく、むしろ言われた内容が主語として頭に浮かぶ。その際ギリシア語の用法がウェルギリウスやプラウトウスのそれに比べて目立たないということは問題ではなく、実際マズヴィーの限定は相当数の作家に当てはまるだろう。しかしアッティカの散文作家達はそれでも幾分広い使用を見せる。リーマン、『文献学雑誌』VI 72 を参照せよ。それから殊に注目に値するのは、文学的散文の外で非人称受動態の特有の用法が見出されることである。ホメーロスには一体に様々な動詞の用法が存在するのであるが、奇妙なことにその用法は例えば歴史的現在と同様確かに欠けており、我々は116頁でホメーロスの非人称の用法に対する反感を天候の動詞の場合にも観察した。しかし短長格の詩から私はヘーローンダースの IV 51 *ἰσθίται* 「ひどい混雑である」を引用することができる。そして特に人目につくが、これまで十分注意されていないのは、宗教儀式のことばがそれを特に好むことである。例えばターソス島の古い碑文には(『ギリシアの碑文』379=コリッツ-ベヒテル編『方言碑文』5455, 3), 儀式を執行するための簡潔な規定に *οὐ παιωνίζεται* 「ここではアポロ賛歌を献じない」という表現が見られる。これが偶然でないことは、アイスキュロス(断片161, 3)<sup>8)</sup> にも同じ非人称受動態が見出されること、またいわゆるミレトスの歌手ギルドの碑文(コリッツ-ベヒテル5495, 28)にもそれが見られ、ここでは *παιῶν γίνεται* (5495, 12) と交替していることが明らかとなる。類例として同じ碑文及び他の宗教上の碑文

に *ἐρδεται* [いけにえを捧げる], *σπένδεται* [ぶどう酒を捧げる], *κατασπένδεται* [献酒をする], *θύεται* [いけにえを捧げる] 等がある。さらに最近発見された紀元前500年頃のターソスの宗教碑文(『ギリシア通信』47, 243)にも *ἐνατεύεται* [九日目の供物を片付けさせる]<sup>9)</sup>, *ἀθρείται* [いけにえを調べる] とある。ところで宗教用語に特有の現象は古いのが常であり, それに従えば非人称受動態はギリシア語でも昔から受け継がれたものであったと言えよう。総じてギリシア人が, 特に一方ではホメロースが, 他方ではアッティカ人が, ためらいも見られるが, ラテン人と異なり, 動作主を述べずにおく表現形式を避けたことは偶然とは言えず, 恐らく深い背景があるのだろう。

ドイツ語とは言えば, ご承知のように, 近代語はこの表現手段を持っている。この点で近代語は非常に進んでいる。例えば O. ルートヴィヒ<sup>10)</sup> の II 418 *nun wird sich wo anders geärgert* [かかんに腹が立った] (ある愚かな夫のことば)。しかしこれは古いドイツ語にそのまま当てはまるわけではない。『マタイ伝』VII 7 で古高ドイツ語の翻訳者はティアアノス<sup>11)</sup> の *vōbīs dābitur* [汝らに与えられるであろう] を *iu gībit man* と訳し, *vōbīs aperiētur* [開けてもらえるであろう] を *iu intuot man* と訳している。この人は非人称的に表現することにまだ慣れていなかったのである。これに反してルーテルは *wird euch gegeben, wird euch aufgethan* と訳している(ヴィルマンズ III 1, 305)。

ここでは非人称表現の性質上, 動作主を表わす表現がその他の受動態の場合(上記143/4頁)よりも回避されることが多いのを我々は予期しなければならない。ギリシア語ではそのような場合例えば与格が現われ, 動作主は与格によっても表わされ得ることを我々は知っている。しかしこれは動作主そのものを表わすには全然役に立たず, むしろ行為が或る者の為遂行される事を示す表現形式にすぎない。例えばトゥーキュディデースによく見られる言い回し *ἐπεὶ* (或は *ἐπειδὴ*) *παρεσκεύαστο αὐτοῖς* (或は *ἀμφοτέροις* 等) は確かに「彼らは準備を終えた後」と訳されるが, 本当は「彼らにとって準備が完了した後」の意味である。

古代ラテン語では動作主の名を挙げることは前代未聞である。その例としてパークウィウスから一箇所(第182行)挙げられるが, ここは確かに改悪されている。ただしケローやカエサルにはそれが稀に現われる(例えば『ガリア戦記』III 25, 1 *cum ab hostibus pugnāretur* [一方, 敵も戦った]; V 30, 1 *cum a Cot-*

*to resisteretur* [コッタが反対していた時]。この変則性を見事に説明したエルヌー, 『言語学会紀要』XV 292 を参照せよ)。リーウィウス(例えば35, 42, 1)<sup>12)</sup> やタキトゥス(例えば『年代記』V 3)<sup>13)</sup> にもあり, 特に極端なのはタキトゥスの『年代記』I 21 *accurritur ab universis* [だれもかれも駆けつける] で, ここでは不特定の主語の一般性を表わすことが問題になっている。プラウトゥスやテレンティウスなら単に *accurritur* とやったであろうが, 厳密な散文作家は明示的に *ab universis* を添える。よく知られたホラーティウスの箇所(『頌歌』II 16, 13) *vivitur parvō bene, cui paternum splendet in mēnsā tenuī salinum* [先祖代々の塩入れがちっほけな食卓で輝いている人は若少の頃から幸せに暮らしている] についてキースリング<sup>14)</sup> は「非人称の受動態によって主語との関係が背景に退くことで(だから *parvō* も与格ではあり得ない), 言われたことの一般的価値がより強く強調される」と適切に述べている。関係文による主語の表示はとともゆるやかなもので, *cui* は *sī cui* と等価である。——ドイツ語では動作主が人である場合は例えば *von der Jugend wurde getanzt* [若者たちによるダンスがあった] のように表現されることがある。ヴィルマンズの『ドイツ語文法』III 1, 303 を参照せよ。

非人称の受動態は全印欧語圏で見られる。ケルト諸語とラテン語は近い類縁関係にあるので, 古アイルランド語に言及しなければならない。そこではこの構文が「行為者を表現してはならない時に, 他動詞以外の動詞に使われ」(トゥルナイゼン, 『古アイルランド語便覧』319)<sup>15)</sup>; そして古代インド語ではその古風さ故に, ヴェーダ以来ますます頻繁に現われるが, その用法の微妙な点は残念ながらもまだ十分に探求されていない。しかしエジプト語では(同系でない言語も挙げることになるが)特に王の行為がよくこの形式で表現されるというすばらしい観察がなされている(エルマン, 『エジプト語文法』70)。王の名をはっきり言わないのは王に対する畏敬の表明である。我々は146頁で述べたツィンマーの仮説が不要であることが分かる。

一般に受動的表現の厄介さは「できる」や「すべきである」を表わす助動詞と不定詞の結合を受動態に転換しなければならない時に生じる。三つの方法が指摘できる。ドイツ語では助動詞は能動態のまま, 受動性は不定詞においてのみ表現される。 *wird gekonnt* は独立的にしか現われず, 不定詞はとらない。ギリシア語と古典ラテン語も同様の方法をとるが, 前古典期と後期のラテン語は次に述べる第三の方法をも知って

いる。古代インド語では不定詞の受動態は存在せず、能力を表わす動詞が受動形をとる。第三の方法は両方とも受動態に換えるもので、前古典期のラテン語にたびたび見られる。ノイエの『形態論』<sup>3)</sup> 3, 613/4, 626/7 に *potestur, possitur, poteratur, possetur; quitur* [できる], *quitus sum, nequitur* 等の使用例が出ている。後期ラテン語にもこの種のものが稀に見られる。その他ラハマン編『土地測量家たち』127, 9に *custodiri debetur* [彼は監視されねばならぬ]とある(トゥーリン, 『エラノス(寄与)』13, 45)。

論理に照らすとこれらの三つの表現形式はいずれも成り立たない。厳密に言えば、不定詞の動詞概念の対象については「することができる」も「されることができる」も、「すべきである」も「されるべきである」も表わせない。それらはすべて能動的表現を、できる限り受動態に転換する試みにすぎない。「始める」を表わす動詞の場合は少し事情が違う。ここでは古典ラテン語でも二重の受動態が許されるだけでなく、好んで使われている。例えばカエサルは『ガリア戦記』IV 18, 4 *pōns institui coeptus est* [橋が作られ出した]のような言い回ししか知らない(これに対しホラーティウスは『詩学』21 *amphora coepit institui* [取手が二つある壺が作られ始めた]と書いている)。動詞の *coepit* は他動詞としても名詞的な直接目的語をとり得るので、受動態で名詞的な主語と結合され得るのである。

これと関係はあるが同じではないのは, *eō* [行く]とスピーヌムの結合の扱いである。元来その受動態は確かに非人称でだけ使われたが、場合によってはスピーヌムの目的語が対格で表わされた。初めは例えば *contumēliam factum itur* 「人々は屈辱を与えんとする」と言ったであろう。しかしすでに早くからその目的語が受動態の主語にされた。ゲルリウス X 14, 3 はカトーから *contumēlia, quae mihi factum itur* を引用している。同様に対格 + *-tum iri* に終わる受動態未来の不定詞の構文でも、対格はもともと非人称的にスピーヌム + *iri* の目的語と意識されていたであろう。しかしテレンティウスの『兄弟』694 *credebas illam in cubiculum iri deductum* [あの女と結婚できると思ったのか]<sup>16)</sup> のような箇所の語順は、すでに前古典期にこのような例の対格が主語としてすべての不定詞を用いた表現に関係づけられたこと (*illam deduci* [彼女が導かれること]との類推で)を示している。*-tum iri* には主格 + 不定詞さえすでに前古典期に見られる。プラウトゥス『船綱』1242 *mihi istaec*

*videtur praeda praedatum irier* [わたしにやそんな獲物などすぐまた取りあげられるのじゃあないかと思うよ]。

**動詞の時制**　すでにアリストテレスが動詞の特徴として *τὸ προσσημαίνειν τὸν χρόνον* [時を示すこと]を挙げている。古代には見当たらず、十七世紀以来ドイツ語の文法に特有の表現 *Zeitwort* [動詞]はそれに由来する。確かに動詞によって、それが表わす行為や出来事が一定の時に引き寄せられると言うことができる。しかし我々は「時制」が何を意味するか必ずしも明確ではないということを互いに了解し合わねばならず、そしてこの目的のために時制形の意味に関する古代の理論に少し立ち入らなければならない。よく使われるディオニューシオス・トラークスの文法にも採用されている精緻で、今日でも利用できるストア学派の時制論(上記15頁)にちよっとだけ触れよう。実際その理論は歪められた形で今日まで個々の時制形の名称に影響を及ぼしている。しかし特にアポローニオス・デュスコロスの本 *περὶ συντάξεως* (上記1/2頁)の二・三のとても鋭敏な観察に注目しなければならない。かつてディオニューシオス・トラークスはいわゆる完了を過去時制の一つと見なしたが、アポローニオスは完了が確かに過去に関係してはいるが, *συντέλειαν ἐνεστῶσαν* を、すなわち現在完了を表わすと述べている(ウーリヒ編 III 21 288頁, 1)。しかし特に価値があるのは第二の所見群で, III 140 (389頁, 8)で彼は希求法現在(は現在継続中の願望を表わし、これに対してアオリストの希求法は非現実的なものの成就の願望を表わすとはっきり述べている。接続法に関しては, *ἐὰν τρέχω* は「もし私が走り続けるなら」を, *ἐὰν δρόμω* は「もし私が走り終えたなら」を表わすとされる。また彼は命令法では *γράφε* は書き続けることを, *γράφον* は書き終わることを表わすと教えている(III 103 358頁, 4以下)。もちろんギリシア語を話した人は誰でもこの区別に気づいていた。しかしアポローニオスが我々の手に入る文法に関する文献においてこの事実を理論的に証明した最初の人である。

近代の統語論とは言えば、統語論を包括してはいないが、ブットマンの文法書(上記26頁)から、完了それ自体は「それが過去の出来事から生じた状態を表わす限りでは真の現在」であるという所見が我々の興味をそそる(PII 88)。ゴットフリート・ヘルマンは我々が先に見たように(29頁)、専らラテン語の観点から時制の用法について詳しく論じている。

我々が動詞の表わす時の意味について語る時、ドイツ語とラテン語からすぐ思いつくのは時階という言葉である。「時階」という概念は詳細に見れば、二種のものを含んでいる。それは先ずある行為や出来事の話者との時間的關係と解され、この点で現在、過去、未来が区別されるが、そこでは大体において隔たりの大きさは問題ではない。いずれにせよこれは大抵副詞やその他の付加物で表現される。こうした言わば絶対的時階と並んで相対的時階、つまりある行為とそれとは別に表現された他の行為との隔たりが存在する。過去の他に過去完了や未来の過去それ自体を表わすのがラテン語の特殊性であり、この言語ではそれが特に発達している。相対的時階を表わすこの表現形式がギリシア語に存在すると証明できるとゴットフリート・ヘルマンは信じた。その際彼がどのようにこの言語を歪曲したかはすでに述べた。

## XXVI.

第一に、我々が特に古代の動詞の時制の用法について語らねばならない時、とりわけ時階のことを、そして特にこの用法のラテン語における形成のことを考えるのはそもそも間違いである。すべてを時階と現在、過去、未来の区別に合わせると、時制の用法が時制形と一致しない場合が多いことを想起して頂きたい。さっそく直説法の時制形において多くのものが一致しない。例えば歴史的現在<sup>18)</sup>は過去の行為を表わすのに使われる形態である。類似のものが三つの言語すべてに見られ、ドイツ語では現在時制の未来時の用法が、ギリシア語では格言的アオリストと非現実話法がそれで、例えば、*ἔλεγεν ἄν*「彼は言うだろう」<sup>17)</sup>は過去を全く指さない。特に一つだけ言っておかねばならない。ラテン語が未来完了と過去完了と与えている概念はギリシア語には馴じみがなく、前者は本来ドイツ語的でもない。ギリシア語の第三未来<sup>18)</sup>はラテン語の未来完了と全く異なるものである。それは完了語幹から作られ、未来の行為に先行する行為や出来事をではなく、未来の完了した状態を表わす。例えば *ἑστήξει* は「彼は立っているだろう」を、そして *τεθνήξει* は「彼は死んでいるだろう」を意味する。第三未来の受動形も事情は同じである。

ギリシア語には我々が過去完了 (Vorvergangenheit) と呼んでいるものを表現する必要も存在しない。大過去 (Plusquamperfektum) がしばしばそのように訳されることがあるが、この用語をラテン語と同じように過去完了の表現として使ったとしたら正

しくない。すでにホメーロスで、また彼のあともずっと、ある行為に先立ち、そのようなものとして文構造の關係の中で表現される行為は、主文であろうと副文であろうと、未完了かアオリストで表現される。副文では例えば λ 523 以下に *Αὐτὰρ ὄτ' εἰς ἦπλον καταβαίνομεν, ὃν κάμ' Ἐπειός, ... δάκρυνά τ' ὠμόρρυντο*「さてまた、エペイオスが作った馬の中に我らが入り込もうとした時に、彼らは涙をぬぐわねばならなかった」とあるが、*καταβαίνειν* [入り込む] は *ὠμόρρυνσθαι* [涙をぬぐう] に先行し、*κάμνειν* [作る] は *καταβαίνειν* に先立つ。(他の人は「我々が馬の中に入り込んでいた時」と訳しているが、恐らく正しいだろう。) 独立文では例えば P 545 *ἔγειρε δὲ νεῖκος Ἀθήνη οὐρανόθεν καταβάσα, προῆκε γὰρ εὐρύπολα Σεύς* [その闘いは、天から降って来て、アテーネー女神が起こされたものだった、つまり先見の明のあるゼウス神がお遣わしになったものだ]。そこは「ゼウスが彼女を遣わしたからだ」ではなく、「ゼウスが彼女を遣わしていたからだ」としか訳せない。アオリストは最初の文で表現された行為に先立つ行為を表わしている。もともと様々な過去を区別することはギリシア人にとって重要ではなかったのである。(ギリシア人が後に如何にして過去完了をラテン語におけるように幅広く使うようになったかはここでは検討することができない。) — 同じことは古代ゲルマン語にも当てはまる。ゴート語ではこれに関して再び原文と翻訳の比較が訳に立つ。ウルフィラは *dedōkei sūssimon ođtois* (ラテン語は *dederat signum eis*) [前もって合図を決めていた] を単に *at gaf...im bandwon* (『マルコ伝』14, 44) と訳し、*ođtines fónon pepoíhkeisan* (ラテン語 *qui fecerant homicidium*) [人殺しをした(暴徒たち)] を *paiei...maurpr gatawidedun* (同, 15, 7) と訳している。ゴート語は過去の様々な等級を区別する手段を全く持っていなかった。しかし古アイスランド語は迂言的形を持っているのに、やはり過去完了を表現しないことが証明される。ホイスラー『入門書』145 § 409 参照。

最初にギリシア語の時制の用法の解明を大きく前進させたのはゲオルク・クルティウスの研究であり、それは彼の著書『時制と法』150頁以下に、それからかつて大いに使われた彼の学校文法の出版後に続けて出した『解説』に見て取れる。彼は古代の観察をさらに発展させ、直説法以外の法は、たとえ直説法過去に属していても、必ずしも、或いは全く過去の意味を持たないと指摘した。今では名詞におけるように動詞にお

いても、出来上がった動詞形と、その後人称語尾や恐らく法を示すと思われる語尾が付けられる語幹とを分けることが起源に関する言語の観察によって可能になっている。例えばアオリスト語幹が直説法の形態の場合と同じく、接続法、希求法、不定法、そして分詞の諸形態の基礎をなしていることを知ることができる。直説法のアオリストだけは大体において過去の意味を持っているが、他の形態はそれを持たない。そこから、アオリスト語幹自体には時階との関連性がないこと、そして直説法における過去との関連は加音によって初めて表わされたこと、そして直説法の加音の付いた形態から過去の意味が加音を持たない形態へ伝わったのだらうという事が明らかになる。これは我々には自明の基本的な論点であるが、以前は全く知られていなかった。次にクルティウスは新しい用語を使って、様々の時制語幹によって表わされるのは「時階」ではなく「時の種類」であり、時階の区別は主に直説法でだけ表わされると説いている。この「時階」と「時の種類」の区別は大変示唆に富んでいた。

もっとよく理解するために、すぐ近くにある言語を越えて、もっと広い視野で考えてみるのがよい。すると我々が慣れているものとは全く違った動詞の表現法が見られる。聖書のヘブライ語とその文法を知っている者なら誰でも、ヘブライ語の動詞では完了と未完了という我々の文法でもよく知られた名前で、二組の時制が区別されることを知っている。しかし同時に、これらの用語は我々の文法で通常意味するものとは全く違ったものを意味すること、つまりこれらの時制形はいずれも直接的に時階を表わすものではないことを知っている。ヘブライ語のいわゆる完了も未完了も過去、現在、未来のことについて使われる。本質的なことはむしろ「完了」と呼ばれる形態が、完了し一応確定的となった行為やその種の出来事を表わすのに対して、いわゆる未完了の表現には未完了の意味が特有なことである。本質的には同じことがアラビア語にも当てはまり、これはセム語共通の時制の用法である<sup>19)</sup>。セム語以外の言語とも比較して、これに関する鋭敏な所見を発表しているのがデンマークの言語学者 Chr. Sarauw<sup>20)</sup>、『トムセン記念論文集』59以下である。さしあたりコーアンの『セム語の動詞体系と時の表現』（パリ1924年）及びメイエが『言語学会紀要』26, 216でこれについて述べていることを参照されたい。

しかし動詞の意味の評価そして間接的に時制語幹の意味の認識にとって特に重要であるのは、殊にスラヴ語圏で観察されたことである。スラヴ語の文法が「体

(Vid) と呼び、フランス人が「動詞の相」(Aspect verbal) と表現しているものがスラヴ語ほど敏感に意識される所はない。現代の文法はそれを「動作態」(Aktionsart) と呼んでいる。(ただしスラヴ語学者アグレルは動作態と相が区別できると主張している。)<sup>21)</sup> スラヴ語動詞の相或は動作態及びそれを表わす表現手段に関する学説を初めて詳細に論じたのはスラヴ語学者 J. ナヴラティルで、1856年に発表された有名な論文においてであった。今ではスラヴ諸語のすべての教科書にこの動作態のことが出て来る。すなわちスラヴ語では、我々が先にセム語の時制の区別において本質的に意識されていると見なしたもの、つまり動詞概念が完了したものとして見られるか否か、またどの程度そうなのかが生きた言語慣用によってとても厳格に留意される。三つの体が区別される。第一は不完了の動作態であるが、この用語は我々の未完了 (Imperfekt) という表現と形が同じであるので都合が悪い。不完了とは話者が完了や結果について考えないで、継続していると意識する行為のことである。重要なのは出来事の実際の状態ではなく、話者の意識である。1916年に亡くなった優れた言語学者アウグスト・レスキーンがいわゆる古ブルガリア語、すなわちスラヴ人の古い翻訳聖書やサロニキに出发点を持つ最古の典礼書の言語（「古代教会スラヴ語」）の文法書（ハイデルベルク1909年）の215頁以下でこれらの動作態について最もうまく定義している。不完了の表現の例としてレスキーンはその本で「彼らは一日中鹿を狩っていた (jagten)」を挙げている。そこでは狩りが終了したか否かは意識されず、その行為が継続中として見られていることしか述べられない。次にわざわざ「一日中」と言われている事に注意して頂きたい。継続中を表わすものが添えられるか否かが確実な目印となる。添えられる時にはすぐ不完了の動詞形と解することができる。これはスラヴ語だけの不完了の基準であるわけではない。——さらに二番目の動作態としてスラヴ語の文法は「完了の動作態」、つまり完了相を区別する。これも「完了」(Perfekt) を想起させる点で都合の悪い表現である。ある動詞は、それによって表わされる行為や出来事の終了・結果が話者の念頭にある時に完了体となる。だから上述の例をそのまま使えば、「彼らは白い鹿を狩って捕える (erjagen) つもりだった」となる。》Erjagen《 は 》Jagen《 に対応する完了相の動詞である。というのはそこでは進展中・継続中の行為を表わすことではなく、単に完了・結果を表わすことが重要だからである。その試金石は我々が *erjagen*

のような動詞に継続を表わす語句を添えられないこと、すなわち「彼らは二日間鹿をしとめた (*erjagten*)」と言えない事から真実であることが証明される。——最後に三番目の動作態としてスラヴ語の文法家は「反復相」(iterative)を区別する。それは出来事や行為が繰り返されることに関係しており、その際当該の行為は完了している場合と完了していない場合のいずれでもあり得る。

従って、スラヴ人の語感からすれば、動詞表現には三つの異なるタイプが存在することになる。スラヴ人は我々がしばしば表現しないでおかねばならない細かな区別をする能力を持っているのである。この差異を表現するためにスラヴ人が用いている言語上の手段はと問えば、一部の動詞はそれ自身が完了的であり、そういう場合が非常に多いと言わねばならない。それら自身が完了的でもあるのはごく稀で、たいてい完了の意味はその動詞を複合語にすることによって表わされる。ふつう単一語は完了的で、複合語は完了的であり、複合語となっても前置詞の独自の意味はちゃんと表される。それでも独自の意味が色あせ、専ら当該動詞を完了的にするために使われる幾つかの前置詞がある。その例として古スラヴ語の不定詞を幾つか挙げよう。*biti* は「打つ」を意味し、当然完了的の動詞である。なぜならこの動詞表現には継続を表わす語句を添えることができるからである。しかし前つづりの *u-* (=ラテン語 *au-*) による複合語 *u-biti* は「打ち殺す」を意味し、完了的である。*bitati* 「集める」(ドイツ語の *gebären* [分娩する]、ギリシア語 *φέρειν* [運ぶ]、ラテン語 *ferre* と同系) は完了的であり、*sū-bitati* 「集合させる」は完了的、*iz-bitati* 「選び出す」も同様である。*tręsti* は「振る」を、*po-tręsti* は「ゆさぶる、静止状態から動かす」を意味する。最後に挙げた前つづり *po-* (これはラテン語 *positus* [状態] の *po-* と関係づけられる) はもはやスラヴ語では完了動詞にするためにしか使われない。

人々が以前より熱心にスラヴ語に取り組み出してから、言語学者達がこの現象に注意を向け、他の言語でも対応する現象や区別を証明しようとする努力が呼び起こされた。特にヘルビヒの「動作態と時階」(『印欧語研究』VI 157 以下)、デルブリュクの包括的な記述(『比較統語論』II 7 以下)、そしてブルークマン(『印欧語比較文法概要』493以下)が提示しているものを参照して頂きたい。これほど厳密に一貫してではないが、ある程度は同様の現象が確かにすべての同系諸言語に見出される。——それどころかさらに細かな

区別が試みられた。例えばデルブリュクは「完了的」を「瞬間的」(*punktuell*)と「起結的」(*terminativ*)とに分ける。「瞬間的」とは彼によれば、その動詞形によって行為や出来事が開始と同時に完了したことが表わされる時の相である。*sterben* [死ぬ]、*töten* [殺す]のような動詞がここに入る。これに対して「起結的」「線状完了的」相はある行為の終点が起点が意識されることを表わす。例えば *bringen* や *holen* [取ってくる]がそうである。そこではある時間に亘りはするが、*tragen* [運ぶ]などと異なり、終点が意識される行為が問題にされている。デルブリュクのもう一つの新しく役に立つ用語は「持続的」(*kursiv*)で、(反復相のように)行為の中の個々の動作を思い浮かべることなく、(起結相のように)起点か終点を思い浮かべることもない時に生じる行為を指す。例えば *erschreitet über die Brücke* [彼は橋を歩いて渡る]は持続的で、*er überschreitet die Brücke* [彼は橋を渡る]は起結的である。

デルブリュクの立てた説への批判がデンマークの学者 Sarauw によって『クーン雑誌』第38巻145頁以下で、またシュトライトベルク<sup>22)</sup>によって『印欧語研究』11、56頁以下でなされた。ここでその専門的な議論に立ち入ることはできない。さらに傑出したデンマークの言語学者イエスペルセンがコペンハーゲン学士院の1914年の刊行物においてこの問題全般について簡潔に意見を述べている。(ノレーン<sup>23)</sup>、『言語の科学的考察入門』、ポラックによる翻訳415頁以下も参照せよ。)私は多くの動詞は完了的でも未完的でもないこと、次に、もともと現在語幹形成の方法は動作態と関係があること、そして前置詞を付けて動詞を完了的にする例のスラヴ語の特殊性は他の言語にも見られなくはないことだけを言っておきたい。(II 181 も参照せよ。)これが最も確実に指摘できるのはゲルマン諸語であり、ここでは確かに動詞の前つづりによってそれが表現されることがある。例えば *schlagen: erschlagen, reisen* [旅をする]: *verreisen* [旅に出る]等の対立を想起して頂きたい。殊にゴート語についてはシュトライトベルクがパウとブラウネの『ゲルマン語学文学論集』第15巻で、次にボヘミアの学者 Mourek が、続いてデルブリュクが重要な証拠を提出した。ゴート語では我々の *ge-* に対応する前つづり *ga-* が特に完了動詞化の機能を与えられることが多い。同様の試みがラテン語とギリシア語についても行われた。しかしここにはそのような用法の確かな印が存在しはするが、まだきちんとした結果は出ていない。

(メルツァーが『週刊ヘルリンの文献学』1919年、76/77頁で疑念を述べている。)

私は先ず現在時制について語るつもりである。そこでは我々が取り組んでいる三つの言語を総括することができる。次に過去の様々な表現形式について語るが、ここではラテン語、ギリシア語、そしてドイツ語を個別に取り上げねばならない。理由ははっきりするだろう。三番目に、未来が動詞によってどのように表現されるか見てみたい。

## XXVII.

直説法現在  ちょっと見ると現在時制について語るのは簡単で容易であるように思われる。現在時制は「現在」を意味する。つまり λέγω, διῶ, ich sage といった現在形は、「言う」という動詞の概念を話者の現在に移すために役立つと言えるだろう。それで事は片付いたように見える。しかしそれほど単純ではない。第一に、現在の表現は不可能とみなし得ることを指摘せねばならない。ディオニューシオス・トラークスの古代の注釈者は、「哲学者たち」の説に従えば厳密に言って現在は存在しないと指摘している。(ヒルガード編『ディオニューシオス・トラークスの文法書における注釈』I 248, 17 以下。)  
 「現在」は最小の時点にすぎない、我々が現在と呼ぶものは一部は過去に、一部は未来に属していると書いてある。ところがその事があまり気にならないのは、自然な感覚にとってまさしく現在が存在し、言語表現は哲学的な思考ではなく、人が通常考えることに従うからである。我々がいわゆる現在と見なす行為や出来事を現在時制で表現することははっきりしている。しかし決して現在形の用法がそれで論じ尽くされたわけではない。例えば ἡ χεῖρ τῶν χειρῶν νίχει: manus manum lavat: eine Hand wäscht die andere [旅は道づれ] のような諺を挙げよう。ここで現在形の νίχει, lavat, wäscht は、現在の瞬間、つまり私がしゃべっている今、洗う行為が行われるということではなく、過去においてそうであったし、未来もそうであろうということが一般的に生じることを意味している。それはいつの時代にも起こる或いは起こり得る一般的真実である。この用法は現在形の真に現在を表わす用法ではなく、時間を超越した用法と言っても差し支えないものである。これは少なくとも一部の現在形にはすでにその形成によって与えられている。例えば φημί のような形態では φη- がいわゆる動詞の語根であり、これには「言う」という概念以外のものは付いておらず、-μι は一人称単数の記号

である。従って動詞の概念と動作主は表わされるが、それだけである。我々が単純に分析すれば「現在」の意味の入る余地はない。つまりそれは時の表示に対し中立の形態であり、例えば加音が過去を示したり、-σ- の要素が未来を示したりするようなそういう要素がその形成に含まれていない限りにおいてのみ現在を表わす。過去や未来との関係が存在しないので、現在を表わすこの形態が残っているのである。しかし時間を超越して使うことは本来そのような現在形にとって自然な意味である。

自明のことだが、一般的命題や諺におけるこの用法と関係のあるのは、例えば比較文における用法であり、ギリシア語ではそのような文の一般的な超時間的現在は接続法並びに注目すべき格言的アオリストと交替することを指摘しておく。

私が導入の所でついでに挙げた用法(47頁)、つまり人が過ぎ去ったものとして表わそうとする過去の行為を、動詞自体は現在形にし、これに πάρος のような過去を示す副詞を添えることによって表現する用法は、起源的なものと見なさねばならない例の超時間的現在の明らかな顕れ、或はその特別な一種であり、ホメロスの言語(例えば Σ 386)や最古のインド人の言語にも見出される。アッティカ人が過去のことを話題にする時、現在時制に例えば πάλοι [以前は], ἄρτι [今しがた] 或は πρόσθεν [以前に] を添えるのも同じ現象と見ることができよう。フォン・ヴィラモーヴィッツがエウリーピデースの『狂えるヘーラクレース』967 ἄρτι καίνεις [お前が殺した] に付けた注釈がこれに関するすぐれた論評となっている。また分詞を用いた A 70 τὰ τ' ἐσσόμενα πρό τ' ἔόντα 「未来のこと、また以前にあったこと」をも参照されたい。ここでは至る所で時間の領域が動詞によってではなく、特別な語によって表現されるのはごく自然なことである。加音も、これだけではないが、動詞に付いて過去を表わす任務を持っているそのような小詞の一つである。

これに引き続いて、これと関係のある二つの事実について語らねばならない。印欧諸語、特に我々の言語では現在時制が一方でははっきりと未来に属する行為について直ちに未来の意味で現れ、他方では過去の意味で現れることである。分かりやすい方、つまり未来時制に代わる現在時制から始めよう。ゲルマン諸語では未来の行為を簡単に現在時制で表わすことは最初からごく普通であったと先ず言わねばならない。ゲルマン諸語の最古の段階ではこれが未来を表示する普通の



形態である。これはウルフイラの翻訳聖書において明らかであり、原文の未来時制がごく普通に現在時制で訳されている。これは今日までドイツ語の言語慣用に特有の現象である。大抵は付加物によって、しかしすでに文脈によってそのつど未来との関連が明らかになる。「明日私は旅に出ます」と誰でも言う。ドイツ語ではそれと並んで迂言的な表現法がどの程度生じたか、またどうして生じたかは後で検討されるだろう。

難なく許され、普通に行われているこの現在時制の未来に代わる使用は、総じてギリシア語とラテン語には馴じみがない。それは古代についてだけでなく、現代についても言える。(もちろん例外がないわけではない。ヴァンドリエス、『言語』119)。近代ギリシア語は未来時制を確かに全く新しく形成し、ロマンス諸語も同様であるが、新しい未来時制によって未来の陳述は現在の陳述から厳しく隔てられる。すでに前に述べたように(9頁)、英語の未来と現在の区別において守られている厳密さは恐らくフランス語の影響に帰せられるだろう。それでも古代ギリシア語において現在時制の未来時的用法のある特殊なケースを挙げることができる。

幾つかのグループが区別される。第一に、ホメーロスの Λ 454<sup>24)</sup> その他では三人称複数の *ἐρύουσι* が紛れもなく「彼らを取り巻くだろう」の意味で見出される。もっともこの形態やこれに属する形態はいつもは現在の意味で使われるのだが、これはすでに古代のホメーロスのテキストの批評家たちを困らせ、アレクシオンという学者をして *ἐρύουσι* のようにアクセントを変更することを提案させ、その結果我々はいわゆる第二未来を手にするようになった。しかしアクセントも確実に伝承されているのだから、これは問題にならない。むしろ *ἐρύουσι* が真の古い未来形である。起源的な *\*ἐρύουσι* がよく知られた母音間の *σ* の音法的な消失によって現在形と同形になったのである。一方 *λύσω* 等においては *λείψω* 等の類推によってその *σ* が回復されている。だから例えばホメーロスで *τανύουσι* [弦を張るだろう]、*ἐντανύειν* [弓を曲げる]が、またアッティカ方言で *τελῶ* [私は成し遂げるだろう]が未来の意味を持っているのも同様に解し得る。

別の例を挙げると、ホメーロスは *ἔδομαι*、*πίομαι* 「私は食べるだろう、飲むだろう」を未来形として使っており、後者はアッティカ方言でもまだそのように使われている。さらに後期のギリシア語の *φάγομαι* 「私は食べるだろう」も挙げられるが、すべて中動態

の形態であり、全く現在時制のように見えるが、未来の意味で用いられることもまた確かである。ここでも形態論に立ち入らねばならない。奇妙な用法の出発点は「食べる」を表わす古い動詞に求められる。一方ではギリシア語の *ἔδμεναι* を、他方ではラテン語の *es, est, esse* や他の言語の対応する形態を引き合いに出すことによって、ギリシア語には *-μι* 活用に従う現在形 *\*ἔδμι* が存在したことが確認される。この *\*ἔδμι* を *ἔδομαι* と並べて置くと、その意味が明らかになる。*ἔδομαι* は *\*ἔδμι* に属する短母音を持つ古い接続法であり、ホメーロスでは十分に是認される特徴的な態の交替を示す古い形成法(例えば *ἴομεν* 「行きましよう」, *ἐπὶν παρμείψεται ὄρη* [季節が変われば])に従っており、古代インド語にも類例がある。ところで接続法はデルブリュクが命名したいわゆる「期待の接続法」として、しばしば(殊にホメーロスでは)簡単に未来の意味を持つ。ラテン語の大抵の未来形も本来接続法の形態である。*ἔδομαι* を分析してみると、その意味が完全に明らかになり、我々が確かな事実立脚している事が分かる。また *πίομαι* は意味が類似した *ἔδομαι* に倣って作られたと言ったことができよう(逆にホメーロスの *ἐδήδοται* [食べられた]χ 56 は *ἐκπέποται* [飲まれた]に倣って作られ、後にそれに倣ってアッティカ方言で *ἐδήδοκα* が作られた)。*πίομαι*: *ἔπιον* に倣って後にアオリスト形 *ἔφαγον* に対応する未来形 *φάγομαι* さえ作られた。——恐らく幾つかの同じように不可解な未来形も同様に判断できよう。ホメーロスの *δήω* 「私は見出すだろう」はある失われた動詞の古い接続法であると思われる。アッティカ方言の *χέω* 「私は注ぐだろう」ははっきりしないが、或はむしろ別の方法で説明されるかも知れない。

これまで我々は未来の意味を持つ外見上の現在形について考えてきた。次に第二のグループに移るが、これはむしろ意味論に関係する。興味ある例は *ἔμι* 「私は行く」である。この純然たる現在形はアッティカ方言では単一語としても前つづりを持つ複合語としても、接続法現在 *ἴω*、希求法 *ἴομι*、命令法 *ἴθι*、不定法 *ἴέναι* と共に全く未来の意味を持っている。もし「行こうとしている」を現在形で表現したければ、*ἔρχομαι* と言うに違いない。この動詞もまたアッティカ方言ではその他の法の現在形と未完了過去が欠けている。その代わりに *ἔμι* の諸形が存在するからである。

アッティカ方言では完全な規則であるものがホメーロスでは必ずしもはっきり現れないが、それでも二・三の箇所では疑問の余地がない。さっそく『イーリア

ス』の第一巻169でアキレウスとアガメムノーンの口論が突発し、アキレウスが νῦν δ' εἴμι Φθίηνδε と言明するが、それは「今度こそ私はプティエーに帰っていくだろう」という意味でしかない。同様に T 362でも εἴμι は未来時制の不定詞 μεθησέμεν [ひるみを見せはすまい] や χαρήσειν [喜ぶだろう] と並んで現れる。Σ 333 ではアキレウスが死んだパトロクロスに言う、σεῦ ὕστερος εἴμι' ὑπὸ γαῖαν 「お前のあとから私は地下にゆくだろう」と。——εἴμι の二・三の同義語もこの現在時制の未来の意味を共有する。ホメロスでは νέομαι 「帰郷する、帰る」がそうであり、例えば υ 105/6 οὐ γὰρ δὴν μνηστήρες ἀπέσσονται μεγάροιο, ἀλλὰ μάλ' ἤρι νέονται 「もうすぐに求婚者の方々が広間に見えます、朝早くからいらっしやるでしょう」。また νίσομαι も同様で、Ψ 76 でパトロクロスの亡霊がアキレウスに言う、οὐ γὰρ ἔτ' αὐτίς νίσομαι ἐξ 'Αἴδαιο, ἐπὶν με πυρὸς λελάχητε [一度私に火をかけたならば、もう二度とは冥府の境から戻ってはこれないのだから]。アッティカ方言では πορεύομαι [進む] が二・三の箇所でするように理解されねばならない。さらに新約聖書からも、特に ἐρχομαι に類似の現象が見られる。例えば『ヨハネ伝』14. 3 πάλιν ἐρχομαι καὶ παραλήψομαι ὑμᾶς [また来て、あなたがたを私のところに迎えよう]。特徴的なのは使徒信条の ὅθεν ἐρχεται κρίναι ζῶντας καὶ νεκρούς [かしこより来りて生ける者と死ねる者とを審きたまわん] : *unde venturus est iudicare vivos et mortuos: von dannen er wieder kommen wird zu richten die Lebendigen und die Todten* である。

この奇妙な現象は何に由来するのか。この点で役立つのはわれわれがスラヴ語の動詞について知っていることである。スラヴ語には完了体動詞の現在形は未来の意味を持つという規則がある。それらは終点に着目した行為や出来事の終了を表わすので、その現在形は未来のことを表わし得るにすぎない。例えばドイツ語の *ich verreise* [私は旅に出る] が話者にとって同時でないことを表わすに違いないように。ところでホメロスの「行く」を表わす動詞も「散策する」や「さすらう」をではなく、「特定の地点へ行く、特定の地点に達する」を意味する。一方ドイツ語の *gehen* は両方を表わし得る（少くとも文語では。我々の *i gang*<sup>25)</sup> が概念的にアッティカ方言の εἴμι にとても近く、*gehen* がフランス語の *marcher* [歩く] に相当する所では *laufe* とする)。それによって εἴμι は解明さ

れ、他の法では未来の意味が見出されないという事と完全に一致する。Sarauw が『クーン雑誌』38, 160 で実証したように、ギリシア語の外でも、「行く」を表わす動詞の現在形を未来の意味で使用する傾向が非常に強い。ラテン語では *eō* に、例えばブラウトウスの『バッキス姉妹』592に *non it, negat se itūram* 「彼女は行かないよ。行かぬと言ってるよ。」という例がある。同じものが古代アイルランド語についても指摘されている。

さらに私は鋭敏なヘレニズム研究者カイベル<sup>26)</sup> の観察に注意を促そう。『パラティウム詩文選』V 46, 7 の風刺詩に *που γίννη*; という問いが出て来る。これは普通「君はどこに住んでいるのか」と訳されるが、言語学的な吟味とは全く無関係に研究したカイベルは、純粹にギリシア語の精通者として、この *γίννη* は「君はどこにいるだろう」以外の意味を持ち得ないと教えている。*γίννεσθαι* は正に *εἶναι* [ある] と対照的に完了的動詞である。またウルフィラが *ἔσομαι* をよく *wairpa* (逐語訳は「なる」と訳していることも参照されたい)。

三番目に未来時制の代わりをする予言的、予見的現在について語る事ができる。殊に神託のことばが未来のことを現在の表現で表わすことを好む。例えばアイスキュロスの『アガメムノーン』126に出て来る例のお告げ *ἀγρεῖ Πριάμου πόλιν ἄδε κέλευθος* 「この道はいつの日か、プリアモス王の都をつかみとる」<sup>27)</sup> がそうである。未来のことが言われているのであるが、予言者或は女性の子言者はその出来事を目の前に見ているので、その表現は現在に向かう。ヘーロドトス (VII 140. 7 以下) やアリストパネース (『騎士』176 とコックによる注) の神託を参照せよ<sup>28)</sup>。

通常は正当と認められないが、さらに四番目のケースを挙げることができる。これについてマーロウが『クーン雑誌』26, 570以下の切れ味の鋭い論文において見事に論じ、ギリシア語の時制の用法について特有用例や誤用を沢山提示している。そこで彼はギリシア語では、並べて表現される未来の行為との同時性が表わされなければならない時、よく現在時制の動詞が使われる事を示している。

二つの例が特に端的である。トゥーキュディデース VI 91, 3 に *καὶ εἰ αὕτη ἡ πόλις ληφθήσεται, ἔχεται καὶ ἡ πᾶσα Σικελία* 「そしてこの都市が落ちれば、シケリア全土が(アテーナイの)手に渡る」とある。ドイツ語でも無造作にそう言うが、「手に渡る」のは未来のことである。ギリシア語の著者が *ἔχεται* と書い

たのは、シシリー全土が奪われるのがシュラクースの占領と同時に起こることを強調したいからである。ヘーロドトス I 109, 10 以下も同様で、そこでは条件文では未来時制が使われ *εἰ ἐθέλησει ἐς τὴν θυγατέρα ἀναβῆναι ἢ τυραννίς* [もしあの姫君に王位が移ることになったら] とあり、主文では現在形が使われ *λείπεται ἐνθεῦτεν ἐμοὶ κινδύνων ὁ μέγιστος* [それからの私にはこの上ない危険が残る] と書かれている。まだ一般には認められていないが、私はこの用法がラテン語にも仮定できると思っている。カエサルの『内乱記』III 94, 6 ではポンペイウスが百人隊長らに次のように言う。 (*tuemini castra et defendite diligenter, si quid durius acciderit.*) *ego reliquas portas circumeo et castrorum praesidia confirmo* 「(陣営を守れ、防衛に精出せ。たとえ何か容易ならぬ事態が起こってもだ。私としては、残りの門を廻ってみて、陣営の守備隊を励ますから)<sup>29)</sup> と。ここではぜひとも *circumibo* と *confirmabo* が期待されるところだが、現在時制が正にギリシア語の箇所と同じように使われている。我々はそこを「同時に(或はその間に)私は廻ってみて励ますだろう」と訳せばそれを正しく判断できる。現在形によってこの行為と別の行為との同時発生が表現されるのである。そしてこの用法は我々が確認した現在時制の超時間的用法とぴったり付合する。——論究を知らせる際に使われる未来時制に代わる現在については、例えば『アッティクスへの書簡集』XIII 23, 1 *nunc respondeo vespertinis* [今から夜の手紙の返事を書こう] がある。アルノービウス<sup>30)</sup> 3, 26 (129頁, 11) にも *praeterminus* とあり、最近ブラーゼの『史的文法』III 1, 286 に続いてレーヴステットの『テルトゥリアーヌスの「護教論」の批判的注釈』(1918年) 64/5頁がこの現象に言及している。

## 訳 註

- 1) 鈴木一郎訳
- 2) アープレイウス 125年頃アフリカのマダウロスで生まれ、カルターゴとアテーナイで教育を受けた哲学者。『黄金のロバ』(或は『転身物語』)、『魔法について』(或は『弁明』)、『秀句集』などの著作が残っている。彼の妻の親類は彼が妖術を使うのではないかと疑っていたという。
- 3) Aen. 1, 700 *statoque super discumbitur ostro*. 「それぞれに、紫色のしとねによこたわる」  
7, 553 *pugnatur comminus armis*. 「白兵戦で戦いは、進行しているし…」
- 4) 10, 355 *certatur limine in ipso / Ausoniae*. 「アウソニアの陣営の、すぐ入口で揉み合えば、…」  
(いずれも泉井久之助訳)
- 4) Loeb 版では *consulēs* となっている。
- 5) Eduard Norden (1868-1941) 1906年からベルリン大学教授。特に古代散文の文体と宗教史の大家。
- 6) Loeb 版では *quae mentibimur* に直されている。
- 7) Zimmer 不詳。
- 8) Aeschylus, Fr. 161, 3 *οὐδ' ἔστι βωμὸς οὐδε παιωνίζεται*. 「[死の神には] 祭壇もなければ、彼をたたえる賛歌もない」
- 9) 葬式のあと9日間死者に供物をした。
- 10) Otto Ludwig (1813-65) ドイツの小説家、劇作家。『世襲山林官』、『ハイテレイ』、『天と地の間』、『シェイクスピア研究』などの著作がある。
- 11) タティアノス 2世紀後半のシリア生れのキリスト教弁証家。初めて四福音書記事を総合して一貫した物語にまとめようとした著書(『ディアテッサロン』)がある。
- 12) Livius 35, 42, 1 *Intentis in apparatusum novi belli Romanis ne ab Antiochō quidem cessabatur*. 「ローマ人が新しい戦いの準備に没頭していた時、アンティオクスとしても手をこまねいていたわけではなかった」
- 13) Tacitus, Ann. V 3 *Sed aliis a primoribus maximeque a magistratibus trepidabatur*. 「しかし、指導的な地位にある他の議員は、特に現職の政務官は、ひどく困惑した」(国原吉之助訳)
- 14) Kiessling 不詳。
- 15) Rudolf Thurneysen (1857-1940) スイスのケルト語学者。ボン大学教授。
- 16) 鈴木一郎訳。
- 17) *ἔλεγεν* は *λέγω* の直説法・未完了過去・三人称単数。本文中の例は過去における可能性(「言ったであろう」)も意味し得る。
- 18) 最近の文法書では「第三未来」という用語は使われず、「未来完了」として扱われる。この能動形は *τεθνήξω* と *ἑστήξω* を除いてあまり使われず、代わりに *ἔσομαι*+完了形の分詞が一般に用いられる。
- 19) 日本語にも英語にあるような時制は存在しない。「ただ話し手の立場から、発話時を基準にして動作が完了しているか未完了であることを表わすだけである」(中島文雄著『日本語の構造——英語と

- の対比——』, p. 151.)
- 20) Chr. Sarauw 不詳.
- 21) Wackernagel は「動作態」と「相」を区別していないが, *jagen* と *erjagen*, *reisen* と *verreisen* のような語のレベルの動作状態の観方の違いは動作態と呼び, 持続態に係る「読む」に対し, 現在における持続態を明示したい時に「いま読んでいます」と言うように, 統語論のレベルで, 動作状態の持続・完了に関して使い分けるのは相(アスペクト)と呼んで区別する方がよい。(井上増次郎著『ことばの原理——言語学を中心問題——』, pp. 219-230)
- 22) Wilhelm Streitberg (1864-1925) ライプツィヒ大学教授. 1892年にブルークマンと共に *Indogermanische Forschungen* を創刊.
- 23) Adolf Gotthard Noreen (1854-1925) ウプサラ大学ノルド語学教授.
- 24) Λ 454 *ὠμισταὶ ἐρύουσι, περὶ πτερὰ πυκνὰ βαλόντες.* 「生肉を啖う鷲鳥どもが, 取り巻くだろう, 翼をびっしりと打ち掛けてな。」(呉茂一訳)
- 25) *i gang=ich gange* は *ich gehe* のアレマン方言形. この方言やスイスの方言では, 中高ドイツ語以来接統法現在だけでなく, 直説法現在でも *gange* が用いられた。(グリムの『ドイツ語辞典』IV, 1, 2 S. 2376f.)
- 26) Georg Kaibel (1849-1901) ゲッティンゲン大学教授. 特にギリシア碑文と喜劇断片を蒐集した.
- 27) 久保正彰訳. 「戦いには予言者が従軍している. ここではカルカースのこと.」
- 28) Herod. VII 140, 7ff. *οὔτε γὰρ ἡ κεφαλὴ μένει ἔμπεδον οὔτε τὸ σῶμα, οὔτε πόδες νεῆατοι οὔτ' ὦν χεῖρες, οὔτε τι μέσσης λείπεται, ἀλλ' ἄζηλα πέλει κατὰ γὰρ μιν ἐρείπει πῦρ τε καὶ ὄξυς ' Ἀρης, ...* 「(そなたらの町は) 頭も胴体も無事にはすまぬ, 足のつま先, また手も胴も余すところなく亡びゆくぞ. 町は火に焼かれ, 猛々しき軍の神に踏みにじられる…」(松平千秋訳) ここはアリストニケという巫女がアテーナイのために託宣を下して言うところであるが, 日本語訳でも基本形である終止形が使われている.
- Aristophanes, Ritter 176 *γίγναι γάρ, ὡς ὁ χρησμὸς οὐτοσὶ λέγει, ἀνὴρ μέγιστος.* 「このお告げに書いてある通り, あなたは第一の男におなりになるんですからね.」英訳は “you shall become” と未来時制にされている.
- 29) 国原吉之助訳.
- 30) アルノーピウス 紀元300年頃の弁証家で, 初めはアフリカの Sicca で修辞学を教えていた. その後キリスト教に改宗し, 『反異教徒論』(七巻) という護教の書を書いた.

(今回も同僚の松川弘氏に訳文を読んで頂いた. ここに記して謝意を表します.)